

「科学価値中立論者」に問う

宗川吉汪

はじめに

北村実氏は本誌 2014 年 4 月号で、事実認識と価値評価とは区別されるべきで、科学は価値中立でなければならない、と論じた¹⁾。これは私の一連の科学価値中立説批判²⁾への反批判でもある。

私が最初に科学の価値中立説を問題にしたのは、坂東昌子氏がマックス・ウェーバー流の“かたい”中立説を論拠に原発是非への意見表明を拒んだからである。板東氏が核兵器廃絶論者であることはよく知られているので、原発は価値中立で、核兵器は違うというのは筋が通らないではないか、というのが私の率直な意見であった。

その後、池内了氏の科学価値中立論を知るに及んで、その論は科学を「真理の聖域」に置く“ゆるい”価値中立説で、結果として科学を権力の手に乗せる仕掛けになっている、と批判した。北村氏や嶋田一郎氏³⁾も、結局は、池内氏と同様の立場に立つと思われる。

1 科学と価値

科学史家の J.D. バナールは、科学とは科学者の営為である、と述べた⁴⁾。また、トーマス・クーンも、通常の科学は専門教育を受けた科学者集団の行う研究、としている⁵⁾。私は、長年、大学で生化学（生物化学、分子生物学）の専門教育に携わってきた。どの学問（科学）もそれに特有の構造（体系）をもつことから、学生には、教科書に従って生化学の基本概念を学ぶように指導してきた。そのうえで、実際の研究に当たっては、先入観にとらわれずに実験結果を客観的かつ厳密に解釈するよう指導した。理研の STAP 研究者ならいざ知らず、大概の科学者にとって「価値中立たれ」が当為命題であることは初歩的常識であり、哲学者からの指摘を待つまでのこともない。

池内氏のように「科学の価値中立」を事実命題とするから問題なのである。科学が「客観的絶対真理」なら「善悪」のような価値観が入り込む隙はない。核物理学（科学）に核兵器や原発製造（価値）の「罪」は問えないことになる。

そもそも科学の発展は弁証法的である。ある研究成果は新たな疑問を喚起する。多くのデータの積み重ねが新たな概念を生む。形而上学的立場とは違って弁証法的立場では、時々の科学的成果を絶対的真理とは見ず、歴史的に発展しつつある人間による自然認識の過程と見る。

北村氏は「連関価値説」の立場に立ち、新カント派の「事実判断（認識）と価値判断（評価）との区別こそが肝腎要」とする。これでは二元論に陥ってしまわないだろうか。

核物理学を“絶対悪”と私が主張したと嶋田氏は誤解したが、北村氏もまったく同じ誤解から私を批判した。反科学論者ならそう言うだろうと書いたままで、同じことを二度も指摘しなければならぬことを遺憾に思う。私は生化学の研究・教育を専門としてきて、これまで嶋田氏や北村氏以外に私を反科学論者と見る人に会ったことがない。誤解に基づく批判は厳に慎むべきだ。

2 放射線防護学パラダイム

クーンは、通常の科学における科学者の活動を、ある科学分野の既成概念（パラダイム、学問体系）に従った「パズル解き」としたが、多くの科学者や哲学者は、これをもって「真理の探究」と勘違いするようである。

私たちはいま、低線量内部被曝は危険であると主張している。しかし、放射線防護学の専門家は、100 ミリシーベルト以下でがん発生が高まった証拠はない、20 ミリシーベルトは安全である、と口を揃えて言う。専門家は、国際放射線防護委員

会 (ICRP) の見解こそが科学的でそれ以外はエセ科学だ、と主張する。たしかに現代の放射線防護学パラダイムは ICRP によってつくられ、独占されている。それゆえ、クーンの定義によれば ICRP の放射線防護学こそが「科学」である。

しかしながら、ICRP 「科学」の目的が核兵器と原発を維持すること (価値) にあることは、いまや衆目の一致するところである。それゆえ、低線量内部被曝の危険性を立証することは、現代放射線防護学のパラダイム変換を迫ることになる。そして新しい放射線防護学の目的は、明らかに核兵器廃絶・原発廃棄 (価値) に向けられる。

3 科学の目的

科学の価値中立論者は、原子力工学 (技術) は原発や核兵器の開発 (価値) を目的とするが、核物理学 (科学) の目的はあくまで自然の原理 (価値中立の真理) を明らかにすることにあると主張する。それゆえ、核物理学者の社会的責任は、自身が核兵器や原発が悪いと思ったとき (価値判断)、せいぜい声を上げる程度ということになる。

科学と技術は往々にして別物と考えられがちである。しかしながら近代西欧科学が技術とともに誕生し発展してきたことは論をまたない。戸坂潤は、技術と科学について「科学は元来、物を作るもの、物的生産を目標とするもの、と考えて悪いという理由はないようだ」として、キュリーのラジウムの発見はすなわちラジウムの製造である、と述べている⁶⁾。科学と技術はともに進化・発展し、融合の度合いを高め、いまや科学技術としてますます巨大化している。

科学技術の内在的危険性はつとに指摘されているところである。福島原発事故に遭遇して、原発のような巨大化した装置がいったん事故を起こすと取り返しのつかない厄災をもたらすことを、この間、私たちはいやというほどに思い知らされた。科学技術は価値中立、などとのんきなことを言っている時代は過ぎた。科学価値中立説は古き良き時代の神話だった。

先の論文で私はブレヒトの『ガリレオの生涯』の一節⁷⁾を引用したが、ここに再掲したい。

「私は思うんだ。科学の唯一の目的は、人間の生存の辛さを軽くすることにある (これは『価値』そのもの)、と。科学者が利己的な権力者 (財界、安倍政権、文科省など) に脅かされて (研究費・助成金・交付金を削減するぞ!), 知識のための知識を積み重ねるのに満足するようになったら (この時『科学の価値中立』は便利な言い訳になる), 科学は不完全になり、君たちの作る新しい機械 (原発や核兵器など) だって、新たな災厄にしかならないかもしれない。() は私の注釈である。

おわりに

世界医師会は、個人の権利・利益 (価値) が医学研究 (科学) に優先する、と宣言している⁸⁾。これを根拠に日本科学者会議 (JSA) 生命と医の倫理研究委員会は東北メディカル・メガバンク事業 (ヒト遺伝子の「科学的」研究) に反対する声明を出した⁹⁾。また、JSA 京都支部は 2014 年定期大会で核分裂エネルギーを利用するあらゆる方式の発電 (核の平和利用) に反対する決議をした。

これらは反科学 (技術) になるか。「科学価値中立論者」の見解が知りたい

注および引用文献

- 1) 北村実「科学の価値中立性と科学者の社会的責任」『日本の科学者』49 (4), 32-37 (2014)。
- 2) 宗川吉汪「原発問題と科学者の社会的責任」『日本の科学者』47 (1), 48-51 (2012)。同「福島原発災害と科学者」『日本の科学者』48 (7), 41-43 (2013)。同「原発事故から科学と科学者を考える」『唯物論と現代』No.50, 43-54 (2013)。同「科学の価値中立説は正しいか」『日本の科学者』49 (1), 55 (2014)。
- 3) 嶋田一郎「科学者は科学によって闘うことができる」『日本の科学者』48 (11), 56 (2013)。
- 4) バナール『歴史における科学 I』(鎮目恭夫訳, みすず書房, 1967) p.6。
- 5) トーマス・クーン『科学革命の構造』(中山茂訳, みすず書房, 1979)。
- 6) 戸坂潤『戸坂潤集』(筑摩書房, 1976) p.348。
- 7) ブレヒト『ガリレオの生涯』(谷川道子訳, 光文社古典新訳文庫, 2012), pp. 239-240。
- 8) 一般原則 8 「医学研究の主な目的は新しい知識を得ることであるが、この目標は個々の被験者の権利および利益に優先することがあってはならない」(2013 年 10 月, 世界医師会総会)。
- 9) <http://www.jsa.gr.jp/03statement/20130521.pdf>. (最終閲覧日: 2014 年 5 月 19 日)。

(そうかわ・よしひろ: 京都支部)